

一般演題ポスター | 実態調査

実態調査

Sat. Jun 23, 2018 9:30 AM - 3:30 PM ポスター会場 (7F イベントホール)

ポスター展示 : 9:30~15:30

ポスター討論 偶数 (軽食) : 12:10~12:50

ポスター撤去 : 15:30~16:00

[P一般-047]パーキンソン病患者の嚥下障害と服薬状況に関する実態調査

○梅本 丈二¹、岩佐 康行²、尾崎 由衛³ (1. 福岡大学病院歯科口腔外科、2. 社会医療法人原土井病院歯科、3. 国立病院機構西別府病院摂食嚥下外来・歯科)

【目的】

抗パーキンソン病 (PD) 薬の多くは錠剤であり、摂食嚥下障害を伴う PD患者は服薬困難を訴えることが少なくない。そこで、在宅 PD患者を対象に嚥下障害と服薬状況の実態を明らかにする目的で調査を行った。

【方法】

PD友の会福岡県支部会員の PD患者で、2017年5月支部総会に参加した35名 (平均年齢71.1±7.9歳) を対象とした。PDの運動症状 (UPDRS part3) と薬物療法の奏功状態 (wearing-offや on-offの有無)、PDのスクリーニング嚥下障害質問票 (SDQ)、抗 PD薬の内容や内服状況、食形態や増粘剤使用、改訂水飲みテスト、舌圧、口腔内細菌数などについて調査した。

【結果と考察】

参加者のうち、軟飯食1名、きざみ食2名以外は普通食摂取であり、水分への増粘剤使用者は2名であった。また、改訂水飲みテスト陽性者は15%、薬の嚥下困難感や咽頭部での停滞感を自覚する者はそれぞれ48%と31%であった。UPDRS part3と SDQのスコア間には有意な相関関係が認められた ($r=0.497$, $p=0.016$)。薬の嚥下困難感や咽頭部での停滞感を自覚するの方が SDQの嚥下障害スコアは高かった ($p<0.05$, $p<0.01$)。さらに、薬の嚥下困難感自覚の方が高率で wearing-offや on-offが ($p<0.01$)、咽頭部での停滞感自覚の方が高率で wearing-offが認められた ($p<0.05$)。普通食摂取、増粘剤未使用でも、薬の嚥下困難感や咽頭部での停滞感を自覚する PD患者が認められ、運動機能の低下、wearing-offや on-offの出現、嚥下障害の進行、薬の服薬困難が相互に関連している可能性が示唆された。